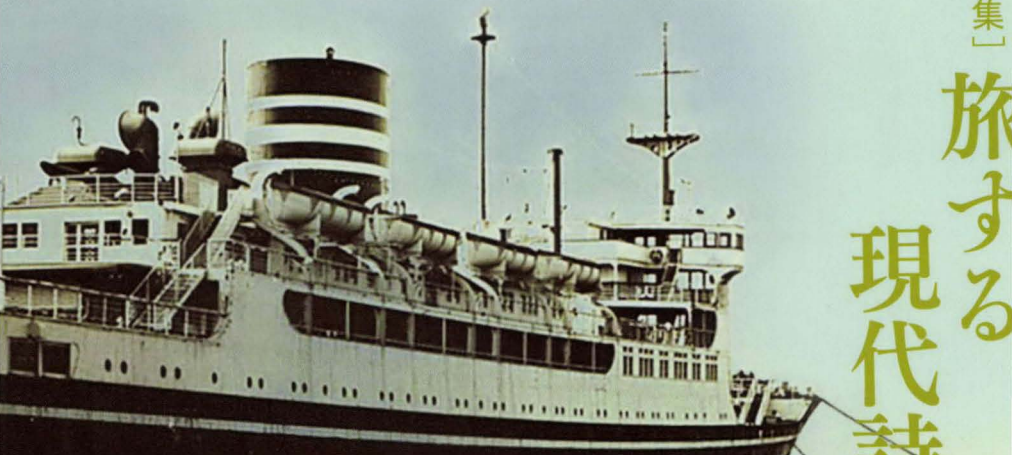
現代詩手帖

［特集］旅する現代詩



［対談］柴田元幸＋ジェフリー・アングルス

［論考・エッセイ］伊藤比呂美、山崎佳代子、四元康祐、鴻巣友季子、田原、吉田恭子、藤井光、安富世里加、ジョーダン・スミス、アンドリュー・カンパーナ

［アンソロジー］エクアドル現代詩（管啓次郎＋見田悠子訳）、中国現代詩（竹内新訳）アイン・ゴック詩集（道上史絵＋新延拳＋森井香衣訳）

［作品］白井知子、常木みや子、くぼたのぞみ、中村和恵、D.W.ライト、ジェフリー・アングルス、宮田浩介

［追悼・大岡信］粟津則雄、渡辺武信、藤井貞和、高橋順子、田野倉康一

［新連載詩］辺見庸「純粋な幸福」

［選考対談］第55回現代詩手帖賞

［特別掲載］トリン・T・ミンハ「映像、空白のページ、空っぽであるということ」（小林富久子訳）

5
2011
MAY

想像上のアメリカ作家

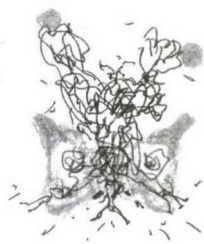
吉田恭子

この国しか知らない祖母の話を
繰り返し　ベランダで聞く
——ジェフリー・アングルス「わたしのアメリカ史」

アンカ・クリストフォヴィチは一九五六年ブカレスト生まれ、十七歳のときに詩が全国誌に掲載されデビュー、テレビなどで若き文化人として活躍、二十三歳で画家ダニエル・クリストフォヴィチと結婚するも、まもなく夫を白血病で亡くし、一九八五年に二十九歳で単身フランスに亡命した。現在、カーン・ノルマンディ大学の教授である。

「西側」に育った者には彼女の半生は典型的な亡命詩人の物語に聞こえるかもしれない。自分の中で研ぎ澄まされてゆく詩的言語としての母語を故郷としながら異国を旅する詩人。ルーマニアから亡命し、反体制派の代表的女性詩人アナ・ブランディアナを翻訳紹介した人。わたしがアメリカのミルウォーキーではじめてアンカに出会ったときも、そのような紹介のされ方だったのを覚えている。はじめてアンカの朗読を聞いたときもルーマニア語だった。

ところがアンカはルーマニア語で詩作を続けてはいなかった。いわば詩的故郷としてのルーマニア語をみずから捨てた。長年の抑圧的政治支配によって、ルーマニア語は——たとえそれが詩的言語であっても——腐敗してしまった、と彼女は言う。言語が腐敗している、という感覚は、「政治の腐敗」などと違って身体的に脳にまとわりつく感



触に他ならない。

同じロマンス語族のフランス語での詩作にも抵抗を感じるという。

アンカが自ら選んで住まう詩的言語世界は英語である。二〇一五年に抒情的かつ実験的な英語の第一長編 *Stela: A Novel* を発表した。とある抑圧的国家の名もない街に失踪した母の足跡をたどる娘の物語。たどっていくほどに真偽はますます曖昧になっていく。

アンカは「自分はアメリカの作家だ」と言う。ルーマニアのルーマニア語詩人としてデビューして以来四十年以上たって彼女はようやくそう言えるようになった。けれどもアメリカ市民権も、グリーンカードもなければ、アメリカに住んですらいない。アメリカをテーマに創作をしているわけでもない。「英語作家」ではなく「アメリカの作家」。ルーマニア語訛りの消えないフランス語と英語を話し、フランスのパスポートを保持してパリとカーンとニースを行ったり来たりしながら英語で創作する「自称アメリカ作家」。自分で名乗らぬ限り誰もそうは考えてはくれないだろう。かと言って、彼女はアメリカの文学的権威や公的機関に「アメリカ作家」だと認められたいわけではない。だから彼女は「想像上のアメリカ作家」と言ってもいい。本人は実在するが、概念的には、根も葉もない「架空のアメリカ作家」。あやうくて無謀。「自称アメリカ作家」の文学言語世界としての「アメリカ」は彼女の内面に広がっていて、そこで彼女はくつろぎ、かつ自由でいられる。だからこその「アメリカ作家」。

彼女と知り合ってからもう二十年になる。ここ数年英語で執筆をしていることは聞いていて、その動機、そしてそこへ至る彼女の生い立ちを聞くことはほとんどなかったが、近頃ロサンゼルスで、パリで、ニースで会うごとに、わたしたちはその話ばかりしている。

ルーマニア語で詩作をしていたころも、文学者としてのアンカを育ててきたのはアメリカの風景と文学だった。細胞医学者だった父親がスタンフォード大学に短期滞在したときに一念発起で娘をお供に連れ立ったのが一九七一年、アンカ十五歳のときで、外の世界に目を開かれた。「気づいたときには作家・詩人たちは自由も権利も国に身ぐるみ剝ぎ取られていた」母国の閉塞的な文化・政治状況下、常にことは違う世界が確かにあるということが励ましになった。その一方、アメリカは活字が織りなす世界でもあった。ロバート・クーヴァーの *Pricksongs & Descants*（一九六九）に衝撃を受け、実験文学の自由と反抗的精神に惹かれ、大学院で英文学を学び高校教師となった（博士課程に進めるのは共産党員だけだったので諦めざるをえなかっ

た)。ブカレストのアメリカン・ライブラリーにせっせと通ったが、父が放射線を使った研究に関わっていたことを口実に、図書館通いについてルーマニアの秘密警察から脅しを受けるようになった。そこで彼女の祖母が代わりに図書館に通い英書を借りてきては孫娘のもとへ運び続けた。後年、夫の死後に亡命したとき、アンカは祖母を後に残したことがいちばん心残りだった。ソルボンヌでアメリカ文学の研究を続け、奨学金を得てデューク大学に留学、その土地にちなんだ白猫キャロライナをとても可愛がっていた。アメリカから帰仏後、フランス初のジョン・ホークス論を出版した。他に写真論や詩人と画家のコラボレーションについての著作がある。

アンカとふたりで、ニースからイタリア国境の町ヴェンティミーリアを訪れた。毎週金曜日は市場が立つのでフランスからの買い物客が押し寄せる。カンヌ、ニース、モナコ、サンレモ……リヴィエラに連なる瀟洒な街に挟まれて、みすぼらしい印象さえ与えるこの終着駅の町に彼女は執着しているようにさえ見えた。世界中の市場で見かける中国製のスポーツシューズや衣類、北イタリアならではの昔ながらの革製品を売る屋台の間を歩きながら、アンカは、ヴェンティミーリアに来ると落ち着く、国境(ボーダーランド)の町に故郷(ホーム)を見い出してしまうのだと語った。その一方で、EU域内で往来が自由であるにもかかわらず、パスポートをパリのアパートに置いてきてしまったことを悔い、なにかの拍子に国境で留め置かれてしまいそのままニースの自宅に戻れなくなってしまうのではないかという不安を繰り返し口にするのだった。境目に憧れながらそこには長居できない、とはいえ国境のどちらかに安住できない感覚が離れないのだろう。

近年海外生まれの「アメリカ作家」はめずらしくないし、その中には英語を母語としない人々も少なくない。彼ら・彼女らもアンカ同様英語作家になり、アメリカ作家になることを選んだ。けれどもこれら移民作家の中に彼女の姿は見えない。国民文学の枠組がゆらぐ現在、アンカのように由来と所在と言語が一致しない創作空間にこそ安寧とインスピレーションを見い出す書き手は増えていくに違いない。想像上のアメリカ作家アンカのアメリカは、彼女の祖母がせっせと運んだ本の中、アメリカン・ライブラリーとブカレストの家との間を何度も行き来した、彼女の祖母には読めない文字の世界にある。